慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	元好問「九日讀書山」詩について
Sub Title	An essay on Yuan-Haowen's poem "Jiuri Dushushan"
Author	高橋, 幸吉(Takahashi, Kokichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2002
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.83, (2002. 12) ,p.43- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00830001-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

元好問「九日讀書山」詩について

高橋　幸吉

一、はじめに

金末元初の詩人元好問（一一九〇～一二五七）は杜甫・蘇軾など多くの詩人を手本として学んだが、陶淵明もまた、彼が意識的に学んだ詩人の一人であった。陶淵明に対する尊崇は金代を通じて高く、元好問も早くから陶淵明に対する関心を示している。[1] 彼の作品で陶淵明に関連するものとして「飲酒」「後飲酒」などがあるが、どれも陶淵明の詩風を襲ったものである。この中で「九日、読書山にて陶詩の『露は凄しくして暄風息み、気は清くして天は曠明なり。』を用いて韻と為し、十詩を賦す」（『遺山先生文集』巻二所収。以下「九日讀書山」詩と略す）は少々異なった要素をはらむ作品である。本稿ではこの作品の内容および表現上の特色について考察し、いささか私見を述べたい。なお元好問の詩文は四部叢刊本『遺山先生文集』を底本とし、詩の解釈については施国祁『元遺山詩箋注』（人民文学出版社、一九八九）を参照した。

二、内容

この作品はモンゴルの太宗十二年（一二四〇）、元好問五十一歳の作である。故郷の忻州秀容県に近い、読書山という山に登ったときのことを題材とし、陶淵明「九日閑居」の一節「露凄暄風息、氣清天曠明」[2]の一字ずつを各首の韻として作った五言古詩の連作である。以下、適宜割愛しながら全体の流れを見ていこう。第一首の情景は忻州城内の自宅から読書山を望む場面からはじまる。（各句の頭にある数字は何句目であるかを示す。）

1 行帳適南下　　行帳　適に南下し
2 居人蹋庭戸　　居人　庭戸に蹋る
3 城中望青山　　城中より青山を望む
4 一水不易渡　　一水　渡ること易からず
5 今朝川涂靜　　今朝　川涂静か
6 偶得展衰歩　　偶　衰歩を展ばすを得
7 蕩如脱囚拘　　蕩たること囚拘を脱するが如く
8 廣莫開四顧　　広莫として四顧開く

（「九日讀書山」其の一）

冒頭の「行帳」は行軍用のテント。張柔が八万の軍を率いて伐宋のために南下したことを指している。[3] 第二句「居人」は家に住んでいる人。「庭戸に蹋る」とは、軍隊が通るので町の人々が家の中に逼塞している情景であろうか。もしくは「居人」を作者自身、「庭戸」を自宅の庭とすると、三句目の「城中より青山を望む」との関連から、「飲酒」其の五「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る。」を意識した表現かもしれない。この場合「蹋」は、菊を採るために腰をかがめているのであろう。重陽を詠った詩であり、この作品全体に渡って陶淵明詩の詩句や情景を踏まえている箇所が散見することから、このような解釈も可能であろう。

前半八句目までは作者の行動を描写し、自宅から川を渡って読書山に向かうという展開である。九句目以降は、各地を転々とした半生や戦乱で荒れた故郷への感慨を述べている。

5 翩翩劉公子	翩翩たり劉公子
6 王田重相攜	王・田 重ねて相ひ携ふ
7 乾坤動詩興	乾坤 詩興を動かし
8 澗壑忘攀躋	澗壑 攀躋を忘る
9 霍侯家甚貧	霍侯の家 甚だ貧なり
10 劣有酒與雞	劣かに酒と鶏と有り
11 城居厭鼙鼓	城に居りて鼙鼓を厭ひ
12 移家此幽棲	家を移して此に幽棲す

第二首では既に山に登ったあとの情景で、読書山中にある福田寺で友人達とささやかな宴を行う。第五句、「劉公子」は施国祁の注によると、劉済のこと。金の建国期に金が南宋との緩衝地帯に立てた傀儡国家、斉の皇帝劉豫の孫。元好問が潁上にいた頃交遊があり、この地で久しぶりに再会したものと思われる。八句目、「澗壑」は山あいを流れる川。「攀躋」は登ること。この句は景色に見とれて山に登る歩みが止まってしまう様子をいう。六句目の「王・田」、九句目の「霍」は未詳。この後は、俗塵を避けることの難しさと隠棲へのあこがれを述べて、この詩を結んでいる。

1 山腰抱佛刹　山腰 仏刹を抱え
2 十里望家園　十里 家園を望む
3 亦有野人居　亦た野人の居有り
4 層崖映柴門　層崖に柴門映ゆ
5 昔我東岩君　昔し我が東岩君は
6 曾此避塵喧　曾て此に塵喧を避く
7 林泉留杖履　林泉は杖履を留め
8 歳月歸琴樽　歳月は琴樽に帰す
9 翁今爲飛僊　翁 今は飛仙と為り

10過眼幾寒暄　過眼　幾寒暄
11蒼蒼池上柳　蒼蒼たり池上の柳
12青衫見諸孫　青衫　諸孫を見る
13疎燈照茅屋　疎燈　茅屋を照らし
14新月入頽垣　新月　頽垣に入る
15依依覽陳迹　依依として陳迹を覧
16惻愴不能言　惻愴　言ふ能はず

（「九日讀書山」其の三）

第三首は福田寺とその周辺の風景描写から始まる。ところが五句目からは実父の思い出を回顧し、これまでとは一変した内容となる。

東岩君は元好問の実父元徳明の号。実父については詩文中でしばしば言及し、養父よりも多く触れている。元徳明は科挙に及第せず、隠士として山林に遊び詩文を作って生涯を終えている。読書山は元徳明が隠棲した場所であり、五句目から八句目はこれらのことを述べている。

九句目以降からは、仙人となって自分や孫たちを見守っている実父の様子を詠い、父への哀惜を述べてこの詩は結びとなる。十句目「寒暄」は寒さと暑さ、転じて歳月の意。父が亡くなってから何年も経ったということ。十三・十四句目「疎燈　茅屋を照らし、新月　頽垣に入る。」に、「二句は先人の詩」と自注があるが、これは元徳明「燈下　林和靖詩

を読む」の一節を用いたものである。[4] 一首を通じて重陽の情景よりも父への追憶を語ることが主題となっている。

第四首は、読書山から見た秋の景色の描写に戻る。

1霜氣一匽薄　霜気　一たび匽(や)みて薄く
2杳杳秋山空　杳杳として秋山空し
3臨高望煙樹　高きに臨みて煙樹を望み
4黄落雜青紅　黄落　青紅を雑(まじ)ふ
5造物故豪縱　造物　故に豪縱
6窮秋變春容　窮秋　春容に変ず
7錦障三百里　錦障三百里
8不盡臺山東　台山の東まで尽きず

（「九日讀書山」其の四）

八句目、「臺山」は五台山。読書山から東に八十キロほどのところに位置している。自分の周囲の霜気→人の少ない読書山の様子→読書山から見た景色、と展開している。さらにその景色も、もやを纏った樹木、紅葉した山肌、遥か先の五台山と、近景から遠景へと描写が移っている。第一句から徐々に視点が遠くに動いてゆき、風景の広がりを充分に描いている。後半は山中の草花を描写し、全体としてほぼ叙景に終始している。

第五首は重陽にまつわる故事を並べ、ここから時の流れに対する感慨を述べる。

5 茲辰世所重　茲の辰（とき）世の重んずる所
6 前代多盛集　前代に盛集多し
7 柴桑有故事　柴桑に故事有り
8 二謝留俊筆　二謝　俊筆を留む
9 併數孟與桓　併せて孟と桓とを数へ
10 此外誰記憶　此の外に誰が記憶す

（「九日讀書山」其の五）

五句目の辰は時の意。「九日閑居」の用字を踏襲している。七句目、柴桑の故事とは陶淵明のこと。八句目、「二謝」は謝霊運と謝朓。九句目、「孟與桓」は東晋の孟嘉と桓温の故事をいう。[5] これらの故事を挙げながら、「此の外に誰が記憶す」と展開し、十一句目以降は人生の短さや、隠者への憧れを述べている。叙事・叙情を中心とした構成である。

3 故人成此游　故人　此の遊びを成し
4 尊酒重相慰　尊酒　重ねて相ひ慰む
5 新詩互醻唱　新詩　互ひに酬唱し

6 清談見滋味　清談　滋味を見はす
7 鱷鯢方偃蹇　鱷鯢　方に偃蹇
8 黿鼉共騰沸　黿鼉　共に騰沸
9 懸險劇褒斜　懸険なること褒斜より劇し
10 清渾雜涇渭　清渾　涇渭を雑ふ

（「九日讀書山」其の六）

第六首では、六句目までは酒を酌み交わす様子を描写するが、七句目からは隠喩を多用して世相を詠う。七句目、「鱷鯢」は雌雄の鯨。凶暴な人物を喩える。八句目、「黿鼉」はカエルのこと。阿諛追従の人を喩える。「偃蹇」「騰沸」は盛んなさまをいう。恐らく金末元初の動乱期において、多く見られた人々のことを言うのだろうが、具体的にはどのような状況に対する批判であるかはつまびらかでない。九句目、「褒斜」は陝西の褒斜谷のこと。難路として有名だった。混乱の時代を生き抜くことが難しいことを喩えたものか。十句目、「涇渭」は涇水と渭水。涇水は濁り、渭水は澄んでいるといわれる。全体的に比喩が多いが重陽との関連性は低く、胸中の憂憤が主題である。

第七首ではまた過去の回想が主題となる。ここでは汴京にいた頃の重陽の詩会を描写する。

1 往年在南都　往年　南都に在り
2 閑閑主文衡　閑閑　文衡を主る

3 九日登吹臺　　九日　吹台に登り
4 追隨盡名卿　　追隨するは尽く名卿
5 酒酣公賦詩　　酒酣にして公は詩を賦し
6 揮灑筆不停　　灑筆を揮ひて停まず
7 蛟龍起庭戸　　蛟龍　庭戸に起こり
8 破壁春雷轟　　壁を破りて春雷轟く
9 堂堂髯御史　　堂堂たり髯御史
10 痛飲益精明　　痛飲　益ます精明
11 亦有李與王　　亦た李と王と有り
12 玉樹含秋清　　玉樹　秋清を含む
13 我時最後來　　我　時に最後に来たりて
14 四座頗爲傾　　四座　頗る傾を為す
15 今朝念存歿　　今朝　存歿を念ひ
16 壯心徒自驚　　壯心　徒らに自から驚く

（「九日讀書山」其の七）

汴京遷都後における、翰林院の人々を中心とした重陽の詩会の回想である。[6] 元好問は当時三十五歳。科挙に及第して国

史院編修の官にあり、翰林院のサロンに出入りしていた。この詩会では趙秉文と交友があった人々が集まり、元好問は「野菊座主閑閑公命作」「野菊再奉座主閑閑公命作」という詩を作っている。[7] 二句目、閑閑は趙秉文の号。能書家としても当時高名であった。九句目、「髯御史」は雷淵。見事な髯をもっていることで有名であった。十一句目、「李與王」は李献能と王渥。十五句目「念存歿」とあるが、金朝滅亡前後の戦乱で多くの友人を亡くし、この年も詩友の馮璧[8]や庇護者の厳実[9]・趙天錫[10]が亡くなっている。生き残った友人のほうがはるかに少なく、その寂寥感がふと去来したことを十六句目で述べている。

続く第八首も過去の回想である。三十代後半、国史院編修を辞職した後、地方官として赴任していた頃の出来事を述べる。

1 我在正大初	我は正大の初めに在りて
2 作吏浙江邊	浙江の辺に吏と作る
3 山城官事少	山城　官事少なく
4 日放浙江船	日に浙江に船を放つ
5 菊潭秋華滿	菊潭　秋華満ち
6 紫稻釀寒泉	紫稲　寒泉に釀す
7 甘腴入小苦	甘腴　小苦を入へ
8 幽光出清妍	幽光　清妍を出す

9 歸路踏明月　　帰路は明月を踏み
10 醉袖風翩翩　　酔袖は風に翩翩たり
11 父老遮我留　　父老 我を遮りて留め
12 謂我欲登僊　　我に謂ふ「登仙を欲するか」と
13 一別半山亭　　一たび半山亭に別れ
14 回頭餘十年　　頭を回らせば余十年なり
15 江山不可越　　江山 越ゆる可からず
16 目斷西南天　　西南の天を目断す

（「九日讀書山」其の八）

元好問は正大四年（一二二七）に内郷県（現在の河南省）に県令として赴任している。第二句「淅江」は河南省の西南部を流れる河で、内郷県もその流域にあった。五句目、「菊潭」は内郷県西北にある。ほとりに菊が群生しており、水が旨いことで有名だった。李白・蘇軾らがこの地を詩に詠んでいる。十三句目、「半山亭」も内郷県内の地名。ここで友人たちとしばしば詩を作っている。[11] 十六句目、「目断」は遠くまで見渡そうとするが見ることができないこと。この時期、彼は友人たちと多くの詩会を行い、詩人として充実した時間を過ごしている。地方官時代の思い出と土地への愛惜が、この詩の主題である。

第九句は実景に戻り、読書山中の福田寺を描写する。

3 龍頭出白塔　龍頭　白塔を出し
4 佛屋壓青嶂　仏屋　青嶂を圧す
5 雲光見秋半　雲光　秋半を見し
6 旭日發毫相　旭日　毫相を発す
7 峨峨寶樓閣　峩峩たり宝の楼閣
8 金界儼龍象　金界の儼なる竜象

（「九日讀書山」其の九）

三句目「龍頭」は竜の頭のような形をした峰をいう。四句目までは遠くから眺めた福田寺の景色を描写する。そして五句目、「雲光」・六句目「旭日」で光が射し、七句目以降は寺の中の個々の建物を描写していく。七句目、「金界」は仏法世界・浄土のこと。「龍象」は羅漢像を言う。読書山を登り、寺に近づき、やがて寺の中に入って建物などを見ていくという経過を、視覚的に見事に表現している。

第十首は再度友人との酒宴を詠う。

1 紫微老僊伯　紫微老は仙伯なり
2 少日見承平　少日　承平を見る

…（中略）…

11思得菊潭酒　菊潭の酒を得て

12爲公制頽齡　公が為に頽齡を制さんと思ふ

13作詩語同游　詩語を作して同に遊び

14明年復尋盟　明年 復た盟を尋ねん

15看翁九節杖　翁の九節の杖の

16翩翩上崢嶸　翩翩として崢嶸に上るを看る

（「九日讀書山」其の十）

一句目、「紫微老」は劉尊師（名・字ともに不明）、紫微はその号。郷土の画家で当時有名であった。このとき既にかなりの高齡であり、故に「僊伯」（仙人の長老）という表現をしたものと思われる。十一句目、「菊潭酒」とは、第八首に見える、菊潭の水で醸した酒のこと。菊潭の水は長寿に効能があるとされており、この水で醸した酒にもその効果を期待している。また「九日閑居」の表現も踏まえて「爲公制頽齡」と言っているのである。十五句目、「九節杖」は仙人の持つ杖。

酒宴が終わり来年にまた会う約束をして、友人が帰っていく姿を見送り、この一連の詩を締めくくっている。

三、作品の特徴

まず第一に挙げられるのは、五言古詩の連作でありながら個々の詩がほぼ時間軸に沿った形（自宅を出る→山に登り友人と会う→山中を巡る→友人と別れる）で展開しているという点である。このような構成は、一首の古詩で用いている例はある。元好問は「黄華山に遊ぶ」「龍山に遊ぶ」などの登山を詠った詩に見られる構成である。また宴遊を詠った詩にも例がある。恐らくこれらの詩と同様の手法を採ったものと思われるが、連作全体を通してこのような構成を用いているものはめずらしい。[12] 結果として、連作全体を通じて物語性ともいうべき要素を持つに到っている。

次に、この時間軸から逸脱して、三・七・八首では過去の回想が挿入されている点が面白い。いわば映画におけるフラッシュバックの手法のように、現在の出来事・情景を描写する中に、突然過去のことがらが現れている。このような手法に先例があるかどうか確認できなかったが、管見の限りでは先行する和陶詩には例がなく、陶淵明詩にもこのような構成は見られないので、陶淵明との関連の上から使用された手法ではないと思われる。他に彼が学んだ詩人に例があるのか、今後の調査が必要であるが、いずれにせよ非常に特異な要素として挙げることができるだろう。

さらに、挿入されている回想も、幼少時の父の思い出→三十代初めの国史館編修の頃→三十代半ばの地方官時代、と時間軸に沿って排列されている。このためこの作品の中には、重陽の登高の様子を順に追う時間軸と、元好問の半生を順に追う時間軸の、二つの時間軸が平行して存在している。ただしこれらの回想部分は、事実ではあろうが、彼にとって最も好ましい光景が切り取られているという点に注意を要する。

四、回想部分の問題

ここで回想部分における問題について触れておきたい。第三首において元徳明は、読書山に隠棲して琴と酒に日々を過ごした悠々自適の隠者として描かれている。しかし当初は科挙及第を目指して勉学のためにこの山に籠もったのであり、科挙及第をあきらめた後に、隠遁生活に入った。官僚としての出世を試みつつも、これを達成できなかったために隠者として読書山に住んだのである。一貫して隠遁生活を志し、実行した人物ではないのだが、このあたりの事情には一切触れず、実父の晩年の一面のみを描いている。そのような父の姿を理想的なものとして、元好問が受けとめていたことの証左ではないだろうか。

第六首においても、当時の状況を充分には反映していない。この詩会の末席に元好問がいたということは事実である。だがこの詩会の背景はそれほど単純ではなかったようだ。当時趙秉文が元好問など門下の士を推輓し、翰林院や国史院のポストに就けていることに対して、世間では趙秉文が「党人」を糾合しているという批判があった。この詩会も参加者の顔ぶれを見ると、実際は趙秉文とその門人たちの詩会という色彩が強い。これらの背景はすべて捨象して、ここでは「在りし日の貴顕の詩会」が全面に押し出され、都における素晴らしい詩会に自分も参加したという、過去の栄華を語る一場面となっている。

第七首も同様である。元好問が内郷県に赴任した際、ここで詩友たちと詩をやりとりするなどして、多くの作品を遺していることは、彼の文集からも窺うことができる。だがここに描かれているような、のどかな地方官生活をしていたわけではない。当時はモンゴルの侵攻が激しさを増していた時期であり、それに対する軍事費は莫大なものとなってい

る。地方官に求められたのは、前線を支えるための兵士・食料・軍資金の調達であった。元好問は中央からの命令と人民への同情の間での、苦悩を吐露した作品を作っている。[13] そこには荒廃した農村の光景が描かれており、第七首で詠われている情景とは結びつきにくい。かなり美化された情景である。

実際には、元好問の半生は蹉跌に満ちたものであったが、そのような出来事には一切言及しない。この詩で描かれている回想は、半生のうちの穏やかであった時期を、より理想化した形で点綴していると言えるだろう。

五、おわりに

読書山は元好問以前に詩に詠まれたことがある景勝地ではなく、また以降も詩に詠まれることがほとんどなかった場所である。この山は元来繫舟山と呼ばれていたが、元徳明が勉学のために籠もったことに因んで、趙秉文が読書山と命名した。[14] 実父ゆかりの地であり、常に実父との思い出が揺曳する地であった。さらには自身が幼年期に見続けた故郷の山であった。[15] 非常に強いノスタルジーをもって彼の心中に存在し続け、各地を遊歴していた頃の詩にもしばしば詠まれている。[16] 元好問にのみ特別な意味を持つ場所であった。読書山にまつわるこのような記憶が、彼の追憶を呼ぶ一つの要素であったのではないだろうか。

本稿では「九日讀書山」詩のみを取り上げ、その特異な点を指摘するのみにとどまった。「飲酒」「後飲酒」などの、その他の陶淵明に関連する詩との比較検討、元好問における陶淵明詩の受容については今後の課題としたい

注

(1) 例えば二十八歳の作である「論詩」三十首（『遺山先生文集』巻）では、第四首で「一語天然万古新た、豪華落尽して真淳見る。南窓白日羲皇の上、未だ害さず淵明は是れ晋人なるを。」と述べている。

(2) 『陶淵明集』巻二所収。「世短意常多、斯人樂久生。日月依辰至、擧俗愛其名。露凄暄風息、氣澈天象明。往鶩無遺影、來雁有餘聲。酒能祛百慮、菊爲制頹齡。如何蓬廬士、空視時運傾。塵爵恥虛罍、寒華徒自榮。斂襟獨閒謠、緬焉起深情。棲遲固多娛、淹留豈無成。」ただし現在では、「澈」を「凄」に、「象」を「曠」に作るテキストは無いようである。

(3) 『元史』巻一四七、「張柔列傳」に「庚子（一二四〇年）、詔して柔等八万戸に宋を伐たしむ。」とある。

(4) 『中州集』巻十「先大夫詩」に見える。全文は以下の通り。「落葉落復落、清霜今幾番。疎燈照茅屋、山月入頹垣。老愛寒花淡、幽嫌宿鳥喧。卷中林處士、相對兩忘言。」

(5) 東晋の桓温が龍山で九月九日に宴を開いたとき、孟嘉の帽子が風に吹かれて飛び、これを嘲った事に対して孟嘉は即座に美文を以て答えた故事。『晋書』巻九八、「孟嘉傳」に見える。

(6) 金朝において文壇の中心は翰林院であり、翰林に奉職する人々が中心となってサロンを形成した。彼らの元にはその門下の士や、詩文に長じた人々が集い、実質的に金朝の文学を担っていた。元好問も当時の文壇の盟主である趙秉文に認められたことで、その文名が知られるようになった。

(7) 劉祁『歸潛志』巻八に、この日の詩会の様子が記されている。これによると趙秉文・元好問・雷淵の他に、陳正叔・潘仲明（両者とも名は不明）らが参加し、野菊・憶橙・射虎など多くの題が出されて、これに対して詩を作っている。

(8) 馮璧…金末の人。承安二年（一一九七）の進士で、翰林院などで官を歴任した。興定年間に致仕して嵩山に隠棲し、金朝滅亡後は金の遺臣と広く交際した。『中州集』巻六に十五首の詩が収録されている。

(9) 厳実…金末元初の武将。はじめ南宋に降って済南を治めたが、後に支配下の三十万戸を率いてモンゴルに下った。のちに万戸公に封ぜられ、漢人世侯として東平府（現在の山東省）に在ってこの地域の軍政を一手に担った。『元史』巻一四八に伝が立てられている。

(10) 趙天錫…代々冠氏の豪族で、金末に冠氏（現在の山東省）の防衛に務めた。モンゴルに下ってからは千戸公に封ぜられ、東平の厳実に従った。元好問と親しく交わり、元好問が冠氏に住んでいた時期には手厚い庇護を承けていたようである。元好問は彼の神道碑を書いている（『遺山先生文集』巻二九「千戸趙公神道碑」）。また『元史』巻一五一に伝が

立てられている。

(11) 例えば、巻三「半山亭に仲梁を招きて飲む」、巻八「春日半山亭游眺」などの作が挙げられる。

(12) 連作を時間軸に沿って排列するという構成は、元好問詩において例がないわけではない。例えば「東坡の居を移すに学ぶ」八首では、冒頭の三首が、建築予定地の荒れ果てた様子→完成した家の様子→家に運び込んだ書籍や銅器の描写、という排列になっている。だが全編を通じてこのような構成を持っている作品は、他に見あたらない。元好問以外の詩人の作品では、杜甫の三吏三別が挙げられる。

(13) 「菊潭に宿す」(『遺山先生文集』巻一)「内郷県斎にて事を書す」(同巻八)などで、これらの苦悩を述べている。

(14) 趙秉文「東岩道人の読書堂に題す」(『閑閑老人釜水集』巻九)に「山頭仏屋五三間、山勢相ひ連なる石嶺関。名字は我の改むる従りを経ずして、更に称す元子の読書山と。」とある。ここでは「我の改むる従りを経ずして」とあるが、これが読書山という呼称の初出のようである。

(15) 元好問は忻州秀容県で生まれた後、生後七ヶ月で叔父の元格の養子となり、五歳以降は地方官であった養父に従って各地を転々としている。この地に生活したのは、わずか四~五年に過ぎない。このとき既に隠者のような生活を送っていた元徳明は、我が子を養子に出したあともしばしば彼を伴って付近を散策し、官吏であった養父よりも元好問と接する機会が多かったようである。一例を挙げれば「忻州天慶観重建功徳記」(『遺山先生文集』巻三五)に「曩予嬰年、先大夫挈之四方。(かつて私が幼かった頃、先大夫(元徳明)は私を連れてあちこちへ行った)」という記述が見える。

(16) 例えば「晋陽の故城を過ぎて事を書す」(『遺山先生文集』巻四)・「張氏庄に納涼す」(同巻一一)・「家山歸夢圖」(同巻一一)などの作品がある。この頃はまだ読書山と命名される前で、繫舟山として詠まれている。

参考文献

漢詩大系20『元好問』　鈴木修次著　集英社　一九六五

『元好問研究資料彙編』　紀念元好問八百年誕辰学術研討会編　文史哲出版社　一九九〇

『全金詩』　薛瑞兆・郭明志編　南開大学出版社　一九九五

『元好問年譜新編』　狄宝心著　中国文聯出版社　二〇〇〇